

琉球大学学術リポジトリ

自動撮影法を用いたイリオモテヤマネコと餌動物の 生息状況の地域間比較

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2009-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅村, 和志, 中西, 希, 伊澤, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9880

自動撮影法を用いたイリオモテヤマネコと
餌動物の生息状況の地域間比較
(Photo-trapping study on the habitat of the Iriomote cat on Iriomotejima Island)

梅村和志・中西 希・伊澤雅子

(Kazushi Umemura , Nozomi Nakanishi , Masako Izawa)

琉球大学理学部・理工学研究科

イリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* は西表島のみで生息する小型のネコ科である。これまでの研究の結果、島の内陸山地部及び崎山半島は低地部と比べて相対的にヤマネコの生息密度が低いとされており、内陸山地部は低地部のヤマネコの生息密度の 5 分の 1、崎山は 2 分の 1 と推測されている。しかしながら、これらの地域ではいまだに生息状況や密度に関する定量的な調査が行われておらず、断片的な資料からの推測しかできない。本研究では崎山半島を調査地とし、既存のデータとあわせて、ヤマネコの生息状況を地域間比較することでヤマネコの生息地の再評価を試みた。

本研究では、自動撮影装置の設置密度を一定にすることによって、確認頻度を密度を表す相対的な指標とした。

崎山で調査した 4 地域でいずれもヤマネコが確認されたことから、人間活動の影響が少ないと考えられる崎山にもヤマネコが生息し、イリオモテヤマネコの安定した生息場所となっている可能性が考えられた。西表島の崎山以外の部分（主要部とする）を標高と傾斜角で沿岸部と内陸部に分け、崎山、沿岸部、内陸部のヤマネコの生息密度を比べた結果、崎山、内陸部、沿岸部の順に高かった (Kruskal Wallis test $p > 0.05$)。したがって、崎山や内陸部には、これまで考えられてきた以上にヤマネコが生息している可能性がある。餌資源量を哺乳類、鳥類の biomass を用いて地域間で比較した結果、沿岸部、崎山、内陸部の順に高かった。またカメラ設置点の標高と傾斜角を地域間で比較した結果、標高は内陸部、崎山、沿岸部、傾斜角は崎山、内陸部、沿岸部の順に高かった。これらの結果から、沿岸部はヤマネコにとって好適な環境であるとする従来の報告と一致した。一方、崎山や内陸部は沿岸部に比べて餌資源量が低く、環境要素の面からはヤマネコの生息密度が高い根拠となる結果は得られなかった。

今回の結果から餌資源、環境要素の面で崎山は沿岸部と内陸部の中間的な環境であると考えられ、この地域に生息するヤマネコの生態を解明することで、いまだに分かっていない内陸部のヤマネコの生態を解明する手がかりが得られるかもしれない。